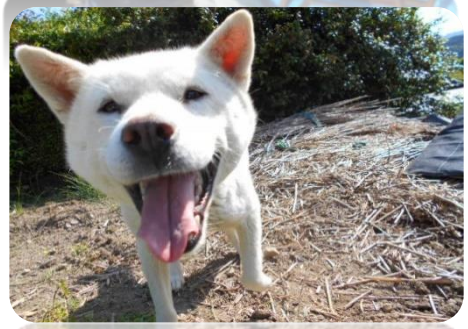
紀州犬の里を訪ねて

紀州犬のふるさと

御浜町阪本は紀州犬のふるさととして有名です。この地には「弥九郎とマン」という紀州犬に関する伝説が残っています。伝説ではありますが、弥九郎は実在した人物で、阪本にある岩洞院というお寺には弥九郎のお墓が残っています（このお墓は御浜町の文化財として登録されています）。

紀州犬の祖先とされるマンはオオカミの血を引いています。飼い主には従順ですが、飼い主以外には気性が荒い面を出す傾向があるようです。そうした紀州犬の性格から、多くは狩猟犬として飼育されています。

授業では阪本で紀州犬を飼育している亀田昭治さんに現在の紀州犬についてお話をうかがいました。



ほんとに狩猟犬？？？

阪本を訪ねると、亀田さんの飼っている紀州犬が愛想良く私たちを出迎えてくれました。オオカミの血を引くという話を聞いていただけに、おそるおそる近づきましたが、その紀州犬はおなかを見せて、なでさせてくれました。吠えることもなく、犬の苦手な人もこれなら大丈夫と、触っています。

この紀州犬は「チョビ」という名前で呼ばれています。血統書では「弥九郎裕実」と登録されています。弥九郎の血を引いているという証です。チョビは普段は亀田さんの畑をイノシシなどから守っています。この時ばかりはしっかりと役割を果たしているようです。

チョビは近くの熊野古道を通る方々に小さい頃から触ってもらったことで、人懐っこくなったようです。このことに、亀田さんは可能性を感じ、今はペットとして飼ってもらえるようにと考えているようです。晩秋になると子どもが生まれるのですが、全国各地でこの子どもを待っている方が多いそうです。

市木木綿の歴史と製法

市木木綿の歴史

　現在、御浜町のおもな産業は「みかん」ですが、市木を含めたこの地域一帯は海から約1キロしか離れておらず、地域の産業にも大きな影響をもたらしました。

　台風などで波が高くなると、川などから海水が畑に入り込み、農作物は大打撃を受けました。

　市木木綿はそうした海水とのたたかいから生まれてきたものであると、かつて市木木綿を作っていた大久保真三さんは表現しています。

　この地域に木綿とそれを織る技術が伝わったのは江戸時代の中頃、今から約230年前と考えられ、以後、明治時代から大正時代の中頃まで、産業として繁栄し、地域を支えていたと考えられます。しかし、1920年代ごろから産業に陰りが見え始めます。特に、第二次世界大戦や、世界的な不況の影響は大きく、このころから新しい産業としてみかん栽培も始まったため産業は衰退しました。

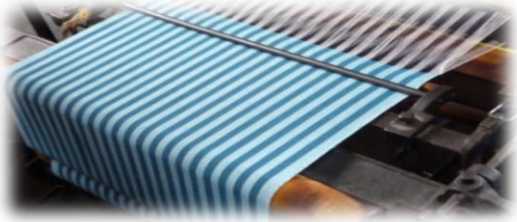
　現在は、熊野市のふとん店3代目の向井浩高さんが、閉業した工場の方から技術を受け継ぎ、かつての地域を支えた産業を今の時代に残そうと、市木木綿を作っています。

市木木綿ができるまで

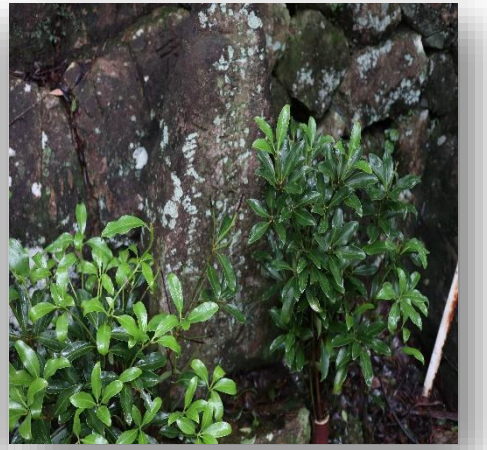
　市木木綿に使う木綿の糸は、「単糸」と呼ばれる、一本の木綿糸を使用し、力織機という機織り機で織ります。糸は大変切れやすいため、糸にいったんのりをつけて、切れにくくする工夫をしています。洗濯を繰り返すうちにのりが落ちると、市木木綿の特徴である柔らかさが出てきます。

　市木木綿を織る工程は、整経機で縦糸の模様を整えた後、この先端にたくさんの輪がついた道具に一本一本の糸を通し、力織機にセットしていきます。次に横糸をシャトルと呼ばれる道具にセットします。これで横糸の準備が完了しました。あとは先ほどセットした縦糸に、この横糸を通していくことで、市木木綿が織られていきます。力織機は、古い道具ですので、天候に左右されて、動きが悪いこともあるそうです。さらに、この力織機はもう作られていないので、故障しても直すことができないそうです。

　こうしてできあがったのが、下のような布になっていきます。これが市木木綿です。



牛鬼碑と片川のいまとむかし



なぜ牛鬼碑を建てたのか？

御浜町の片川という所には牛鬼碑という御浜町の文化財があります。天正3年という文字がありますので、1575年に建てられたものと考えられます。この年は、長篠の戦いがあった年です。

その昔、片川では牛鬼という妖怪がでて村人を困らせていたため、新蔵という人が妖怪を退散させるために石碑を建て、それ以後牛鬼は現れなくなったという話が残っています。

しかし、妖怪は本当にいるのでしょうか？
いないとすると、この石碑は何のために建てられたのでしょうか？

地元の方にお話をうかがうと、石碑が建てられた別の理由が分かってきました。

むかしの片川

現在の片川は10人くらいの人が住んでいる所で、授業でここを訪ねた時はほとんど人を見ることができませんでした。そんな中、たまたま草刈りをしていた地元の方が、いろいろとお話しくださいました。

昭和20年頃は疎開のため、小学校に 65 名の子どもがいるくらいたくさんの人がいたようです。県会議員も輩出し、その方たちは「緑橋」や「旧熊野大橋」の建設にも大きく貢献しました。線香工場や発電所、製材所もあり、たくさんの人がいたようです。

ここを訪れる人も多かったようで、特に材木を奈良から新宮に運び商売した人たちが奈良に帰る際に、この地を通って帰ったようです。その人たちを狙った「追いはぎ（今でいう強盗）」がその人たちを困らせていたそうです。牛鬼碑はそうした追いはぎが出る所に注意を促すために設置されたそうです。牛鬼碑はそういう役割を果たしていたようです。

よく見ると大きな家のあとがたくさんありました。かつての繁栄がうかがえます。

あなたの家は海からどれくらいですか？

紀南高校から見た尾呂志川

紀南高校周辺の地形を考える

皆さんのおうちは海からどのくらい離れていますか？また、近くに川はありませんか？

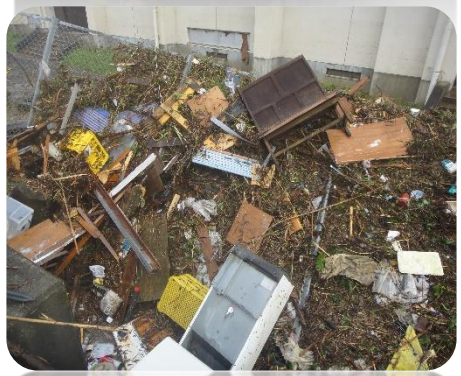
紀南高校は海からは直線で約700メートル、近くには尾呂志川が流れています。尾呂志川の河口から高校の近くまでは約1. 4キロです。

なぜこんなことを考えるかというと、平成23年に発生した二つの大災害の経験があるからです。1つは東日本大震災、もう1つは紀伊半島大水害です。後者は紀南高校にも大きな影響を及ぼしました。地震についてはいつ発生してもおかしくないといわれています。水害については平成29年にも校舎が被災しました。そこで、今後の防災・減災のためにこれら災害について学びました。

河口からの距離

東北大震災時の津波到達点

水害時の写真



川をさかのぼる津波

東北の地震による津波で多くの方が犠牲になりました。宮城県に大川小学校いう学校がありました。地震発生後校庭で避難するルートを考えている間に、近くの川からさかのぼってきた津波に巻き込まれ多くの子どもたちが犠牲になりました。

この大川小学校は、河口から約4キロ離れていましたが、そこには10メートルの津波が押し寄せたそうです。紀南高校は河口から4キロも離れていません。想定される地震による津波のリスクは高いことが分かります。

2度の水害

また、近くの尾呂志川は大雨の時に増水します。平成23年に起こった水害ではこの川の堤防が決壊したことにより校舎は被災しました。近くに住んでいた方も亡くなってしまいました。

これらを考えると、紀南高校の周辺は災害のリスクが高いことが分かります。だからこそ、災害を常に意識し、防災の日常化を図ることが重要であるということがわかってきます。

皆さんは災害発生時どこに避難するか分かっていますか。日頃から意識して理解しておくことが防災・減災につながります。